理髪師のある仕事

法音院大會

俺は息子を同性愛者ということで失っていた。強制収容所から手紙は来ない。ウィーンは陥落寸前で昨日も数十ブロックのところのチェス仲間の家の近くに爆弾が落ちた。常連だったユダヤ人の花屋がくれた花の花壇に水をやる。「開店」の札を掲げる。そうして床屋が開く。

俺はナチを好きになれなかった。もちろん息子を取られたこともあるが、焚書と映画がプロパガンダになったことが嫌いだった。オーストリアの文化に干渉されることも一因だった。

オーストリアがドイツ第三帝国に入ってからの俺の仕事はあまり変わらなかった。ユダヤ人の客がいなくなったことは大きかったが。

しかし、俺はもうすぐナチから解放されると信じていた。戦況は敗戦の雰囲気で新聞は巻き返しを宣伝していたが焼け石に水にしか見えなかった。

常連のお客が今日も来る。敬礼だけはしゃっきりとしているユーゲントの男の子をかっちりとした髪型に整える。突撃隊と付き合っているという噂のある近所の女性の髪をかわいく整える。ユダヤ人がいなくなって銀行の副頭取になったじいさんの前回も話していたもういないユダヤ人の同僚の愚痴とナチのおかげで出世できたことを聞きながら薄い髪を乾かしてやる。

営業はゆるい。物資が無いながらも妻とお茶をしたり、お客が居ないときは仲間とチェスをしたりする。この日は調子が良く四勝一敗だった。途中で警官が入ってきたが仲間はおどけて「ハイル・ヒトラー」とオーストリア語のアクセントで言っていた。

次の日、ウィーンは解放された。ソ連軍がウィーンに入ってきてお客がソ連兵ばかりになった。ハーケンクロイツの入ったマグが捨てられ、鍵十字のペンダントやワッペンのついた服が車道の真ん中で燃やされた。

次の日もモスクワから来たソ連兵のぼさぼさの髪を相手し続けた。代金としてソ連の髭の人物たちの横顔の紙幣を何枚か貰ったりしていた。その夜もヒトラーや敬礼の人々のポスターが剥がされ焼かれていた。

次の日も混乱していた。しかし、午後には軍のお客が明らかに減っていた。

次の日、常連達が突撃隊の男との噂のあった女性を連れてきた。髪を剃れということだった。常連達は女性をナチの手先だと言って店先に押さえつけていた。女性は何も言わなかった。常連たちは慈悲なんて考えるなと言っていた。

「おい。これはナチスと寝た女だぞ。一気にやっちまえ。」

「お前らだって『ハイル・ヒトラー』って言ってたじゃないか。」

「知るかよ。言わなきゃ殺されてたんだぜ。」

「ナチのやり方に問題があったんだ。それはこの女がナチを支えてたからだぞ。」

「あんた早くやっちゃってよ。」

「この売国奴を剃って見せしめにしようぜっていうことはもう決まってんだ。」

「お前しか髪剃れる奴がいないんだよ。早くしてくれ。」

俺はこの前セットしてやったふわふわの女性のブロンドの髪をバリカンで全て剃った。その直後女性は駆けて家に入っていった。ブロンドの髪の塊がバリカンの刃から地面に落ちた。

次の日の朝、ドナウ川から彼女と突撃隊の男との心中死体が見つかった。彼女の薄橙より更に白くなった頭皮とバリカンで一気に剃った傷のかさぶたが四月の朝日の中で光っていた。